

非核の政府を求める石川の会 会報

非核・いしかわ

3・11ビキニデーから、四月ウイーン、
八月広島・長崎、一〇月国連へ

核兵器のない世界へ 歴史のページを開こう

激動する世界と日本。二〇一二年は、核兵器のない世界の実現にとっても重要な年です。昨年、第六六回国連総会では、二〇一〇年核不拡散条約(NPT)再検討会議での前進の上に、核兵器禁止条約への具体的進展を求める声さらさらに大きく広がり、三分の二を超える国々が、核兵器禁止条約の交渉開始を求める決議を支持しました。

四月三〇日から、次回NPT再検討会議第一回準備委員会がオーストラリア・ウイーンで開催されます。「核兵器のない世界」の合意を行動へ、多くの国の政府が会議に向けて行動を起こしています。世界各国でも、核軍縮、核兵器の撤去、核・軍事予算の削減など、様々な反核平和のとりくみが強められています。いま、人びとの声と行動が核兵器禁止へと国際政治を動かしています。

核兵器のない世界へ、歴史のページを開くのは、

事務局

〒920-0848

金沢市京町 28-8

石川民医連労働組合気付

Tel 076-251-0014

郵便振替

00760-0-15689

非核 5 項目

- ① 全人類共通の緊急課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める。
- ② 国是とされる非核三原則を厳守する。
- ③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する。
- ④ 国家補償による被爆者援護法を制定する。
- ⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する。

そのために努力する多くの国の政府と市民社会の草の根の一人ひとりの行動です。

一九五四年三月一日未明、アメリカは中部太平洋マーシャル諸島のビキニ環礁で、「ブラボー」と名づけた大規模な水爆実験を行いました。広島型原爆の一千倍を超える威力の水爆によって強い放射能を含んだ「死の灰」は、アメリカが指定した「危険水域」をはるかに越え、マーシャル諸島島民や周辺地域で操業していた日本のマグロ漁船に降り注ぎ、海流や気流に乗って世界中に広がりました。その被害の全容は、アメリカが実態を隠し、日本政府もその圧力の下で調査を打ち切ったため、いまだに解明されていません。

三月一日の「ビキニデー」は、五月から始まる国民平和大行進、八月の原水爆禁止世界大会に向かう全国的な行動の出発点になります。ことしも全国から海外から「第五福龍丸」の母港、静岡県焼津市と静岡市での国際フォーラムや全体集会、分科会、献花墓参行進などにたくさんの方が集まり、核兵器を禁止し、核被害を根絶する決意を新たにします。

石川県からも代表団が参加します。



セビリア大聖堂にて

念願だった南欧スペインの旅。中でも歴史都市セビリアの魅力に惹きつけられた。大航海時代の繁栄を今に伝え、メリメ作の『カルメン』や戯曲『セビリアの理髪師』の舞台になった街▲セビリア大聖堂(世界遺産)内部には、コロンブスの葬列が大きく彫刻展示された墓がある。訪問したその日、聖堂のそれも正門の内側に陣取る労働者の宣伝行動に出会って驚いた。添乗員では、教育労働者が「勤務が長時間で、家族との時間が持てない！」と訴えているとのこと。わが日本との歴史の違いを見る思いだった▲そして、やがては「太陽の沈まない国・スペイン」へと覇権を築いたハプスブルグ帝国であったが――私たちが訪問した二〇一一年一〇月は、時あたかも世界経済危機の第二幕、ギリシャ発のユーロ危機に緊張感高まる地中海地域▲思えば、いま、世界の各地で「九九%の」格差に苦しむ人たちによって、安心して暮らせる国と地域を実現してこそ、「経済」が文字通りの『経世済民』へと連なるのだと感じた。(二)

石川県内各市町の非核平和宣言等の採択・加盟状況(2012年2月1日現在)

自治体名	非核・平和自治体宣言 採択(注)	平和市長会議 加盟	日本非核宣言 自治体協議会加盟	非核日本宣言 採択
石川県	○1998年2月20日	—		
金沢市	○1985年12月21日	○2009年12月		
七尾市	○2006年3月27日	○2011年1月		
小松市	○1998年6月9日			
輪島市	○2006年6月23日			
珠洲市	○1995年3月14日	○2010年5月		○2010年 月
加賀市	○2005年12月19日			
羽咋市	○1988年9月12日			○2008年3月
かほく市	○2005年3月15日			○2009年11月
白山市	○2005年6月29日			○2007年12月
能美市	○2006年3月13日			
野々市市	○1984年3月19日	○2008年2月	○1987年 月	
川北町	○1993年6月10日			
津幡町	○1992年3月18日			○2007年12月
内灘町	○1992年6月11日	○2009年3月	○2011年10月	○2008年3月
志賀町	○2006年3月17日		○2005年10月	
宝達志水町	○2006年9月21日			
中能登町	○2005年12月19日			○2007年12月
穴水町	○1993年6月8日			
能登町	○2005年12月19日			
計	20 (100%)	5 (25%)	3 (15%)	7 (35%)

(注)「平成の大合併」の後、改めて県内全ての自治体が「非核・平和宣言」を採択した。

平和市長会議とは

一九八二年六月二十四日、ニューヨークの国連本部で開催された第二回国連軍縮特別総会において、荒木武・広島市長(当時)が、世界の都市が国境を超えて連帯し、ともに核兵器廃絶への道を切り開こうと「核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画」を提唱し、広島市・長崎両市長から世界各国の市長宛てにこの計画への賛同を求めました。平和市長会議は、この「核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画」に賛同する世界各国の都市で構成された団体で、一九九〇年三月に国連広報局NGOに、一九九一年五月には国連経済社会理事会よりカテゴリーII(現在は「特殊協議資格」と改称)NGOとして登録されました。現在、世界一五三カ国・地域五二六都市の賛同を得ています(二〇一二年二月一日現在)。

日本非核宣言自治体協議会とは

日本非核宣言自治体協議会は一九八四年に広島県府中町で設立されました。設立の趣旨は「核戦争による人類絶滅の危機から、住民一人ひとりの生命とくらしを守り、現在および将来の国民のために、世界恒久平和の実現に寄与することが自治体に課せられた重大な使命である。宣言自治体が互いに手を結びあい、この地球上から核兵器を消す日まで、核兵器の廃絶と恒久平和の実現を世界の自治体に呼びかけ、その輪を広げるために努力する」というものでした。

現在、当協議会は全国の二八三自治体(二〇一二年一月一日現在)により組織され、総会、研修会のほか、さまざまな平和事業などを通して設立の趣旨の実現に努力しています。

【ピースデポ「核兵器・核実験モニター2011年一二月号」より転載】

国際赤十字・赤新月社が核廃絶決議

人道機関として「歴史的役割担う」と宣言

一月二六日、国際赤十字・赤新月運動は、ジュネーブで開催された二〇一一年度代表者会議において、「核兵器廃絶へ向かって進む」と題された決議を採択した。同運動は、世界一八七カ国・地域の各国赤十字社・赤新月社と、それらを支援する情報共有、技術的支援などを行う「国際赤十字社・赤新月社連盟（IFRC）」、そして紛争下の人道支援活動を統括する「赤十字国際委員会（ICRC）」から構成される。

今回の決議は、核兵器の無差別性や非人道性への批判、また、国際人道法の原則に従って核兵器を禁止すべきであるとの考えを、最も大きな枠組みである「運動」として確認した点で画期的である。

決議には赤十字国際委員会と三三カ国・地域の赤十字・赤新月社が共同提案者として名を連ねている。日本赤十字社は最初の提案国の一つである。以下、決議文を紹介する。

【資料】二〇一一年一月二六日

「国際赤十字・赤新月運動代表者会議」

◎決議「核兵器廃絶へ向かって進む」

一、いかなる核兵器の使用による結果も、計り知れない被害をもたらすことが予想されること、それに対する十分な人道援助能力が不在であること

と、そして核兵器使用を防止することが喫緊の課題であることを強調する。

二、核兵器のいかなる使用も、国際人道法の、とりわけ区別性、予防措置及び均衡性の原則に合致するとみなすことは不可能であると判断する。

三、すべての国家に以下を要請する。核兵器は、使用の合法性に対する見解に関わらず、二度と使われてはならないことを再確認すること。

四、現存する誓約と国際的義務に基づき、法的拘束力を持つ国際条約によって、核兵器の使用禁止と完全廃棄を目指す、誠実かつ緊急で断固たる交渉を追求し、合意すること。

五、すべての本運動構成団体に対し、人道外交の枠組みを活用して以下に取り組むことを求める。

核兵器の使用による破滅的な人道的結果及びそれにより生じる国際人道法上の問題、並びに核兵器の使用禁止と完全廃棄に向けた具体的行動の必要性に関して一般大衆、科学者、医療従事者、政策決定者の意識を啓発する活動を、可能な限り行うこと。政府及びその他の関係者との間で、人道法や国際人道法に関する絶え間ない対話を可能な限り行い、本決議で示された赤十字・赤新月運動の見解を広めること。（訳 ピースデポ）

【編集部注】ピースデポは市民の手による平和のためのシンクタンクです。軍事力に頼らぬ安全保障体制の構築をめざし、調査・研究・情報活動を行う非営利団体（NPO法人）です。

「2011年3月11日」を忘れない！

講演会のご案内

演 題 新たな福祉国家を展望する
—福祉国家と基本法研究会の取り組み—
講 師 井上英夫さん
(金沢大学地域創造学類教授)
と き 4月1日(日) 13:30~16:00
と ころ 金沢市松ヶ枝福祉館 4階ホール
主 催 医療・福祉問題研究会
後 援 石川県社会保障推進協議会
*福祉国家と社会保障基本法編「新たな福祉国家を展望する」(旬報社)も当日販売されます。

カンタータ「悪魔の飽食」石川公演・プレ企画

文化講演会のご案内

演 題 悪魔の飽食
—731部隊の実相—
講 師 訪昭三さん(全日本民医連名誉会長、城北病院名誉院長)
と き 3月4日(日) 14:00~16:00
と ころ 金沢勤労者プラザ 101号室
参加費 500円(資料代含む)
主 催 「悪魔の飽食」石川公演実行委員会
連絡先 小林 090-4323-8987
板坂 090-6273-4114

【ピースデポ「核兵器核実験モニター」二〇一一年
一月号より転載】

二〇一〇年の核廃絶に向けて 本気で取り組む

平井竜一・逗子市長にインタビュー

逗子市は一九八四年に市議会で「核兵器廃絶に関する決議」を行い、市制五〇周年の二〇〇四年に「逗子市非核平和都市宣言」をしました。市の平和事業では、「ピースメッセンジャー」の派遣、被爆クスノキの植樹、被爆証言の継承などに取り組んできました。

今年で二〇回目を迎えたピースメッセンジャーは、戦争の悲惨さや、核兵器の恐ろしさ、そして平和の尊さを次世代に伝えていくために、公募した約二〇名の中学生を、毎年、広島市と長崎市に交互に派遣する事業です。私も、市長になった翌年の〇七年に一緒に長崎に行きました。そこで田上富久長崎市長に初めてお会いし、被爆の経験はこれからますます風化していくので、しっかりと伝えていかなければならないと感じました。(中略)

今年の八月二五〜二七日には、「第一回ずし平和デー」を開催しました。市民による実行委員会の主催で、被爆者の写真展、映画上映、コンサートが催され、最終日には、市主催で「非核平和シンポジウム」を行いました。期間中には、市内外から延べ一、三三八人の方が訪れました。この経緯としてあったのが、二四年前から継続されている、市内PTAのお母さんたちの「親子映画会」の取り組みとのつ

ながりでした。ピースメッセンジャーでは、派遣後に直接体験を伝える場が少ないように感じていたので、親子映画会の方に報告の場を作ってもらったんです。そのきっかけで、行政と市民でもっと平和について語り合う場を作りたいという思いが共鳴し、市民団体の方々と企画を持ち寄って、「第一回ずし平和デー」の開催に至りました。

もう一つのきっかけは、昨年一月に藤沢市制七〇周年記念行事として行われた、「平和の輪をひろげる湘南・江の島会議」です。藤沢市と市民実行委員会の共催で開催され、神奈川県内の全自治体首長が名を連ねた「自治体非核平和アピール」を採択しました。私もその場に参加し、この流れを単発で終わらせてはいけないと強く感じました。秋葉忠利広島市長(当時)や田上長崎市長も参加されました。その際、二〇一〇年までに核廃絶を達成するという、平和市長会議が牽引されている目標について、本気で取り組んで、より大きなムーブメントにしていきたいよう、とお話ししました。自治体としても具体的に行動を起こしていかないと、「核兵器のない世界」には到達できません。宣言自体にも意味はありますが、そこに色んなものを重ね、様々な取り組みをしていくことが必要です。

「湘南・江の島会議」での海老根靖典藤沢市長の核兵器廃絶への強い思いに、私も連携したいと思い、江の島で発した平和アピールを引き継ぐかたちで、ずし平和デーの非核平和シンポジウムを企画したんです。秋葉前広島市長にご講演を、田上長崎市長にはビデオメッセージをいただき、海老根藤沢市長、松尾崇鎌倉市長と私の三市長と、三市の市民実行委

員会の方々による活動報告を行いました。来年には、鎌倉市でやろうという話も出ています。こうして生まれた自治体間の連携の広がりはとても大切ですね。海外との連携にも発展していくと更に良いですね。

ピースデポの「北東アジア非核兵器地帯を求める署名」には、私も賛同していますが、南半球の陸地がほぼ全て非核地帯になっているといった事実を知ると、署名や宣言の現実味や価値を感じられるし、すつと入ってきますよね。オバマ大統領にも核廃絶も「Yes We Can」だと、全世界からもう一回突き返すくらいの意気込みがあつていいですよ。あと、やはり唯一の被爆国である日本が広島・長崎を起点としつつ、世界にメッセージを発していくべき時に来ていると感じます。総理大臣も、「二〇一〇年までにやるぞ」というくらいの演説をすればいいと思いますね。

私が逗子の政治に関心を持ったきっかけは、池子米軍住宅の問題でした。大学生の時、市長選の前日に候補者を呼んで、友人約百人を集め、自分たちのまちのことを考えよう、と企画したんです。それから特に、逗子の地域で何かしら貢献をしたいと思うようになりました。「民主主義の実験場」とも言われた池子の問題は、関わった人々にとっては人生をかけた運動です。その中で自分の志を自覚をしてやってくる、約二〇年後に市長になりました。これを解決するのは自分しかない、と思いつながらやっています。(まとめ：塚田晋一郎)

非核いしかわの会 リレーエッセイ

六七年間、それは長すぎないか!!

蒔 昭三

新潟から京都までの、北陸の国道八号線、その八号線は金沢から野々市、松任を経て手取川を渡って能美市に続いている。真直ぐな道のようにはあるが、蛇行している。しかし気をつけて走ると、松任街の南端をすぎると直線の道路が約三キロ続く。ここは、北陸の八号線では最初に土盛りされた部分で、私の子供時代の一九三五年（昭和一〇年）前後である。当時は緊急時には陸軍の飛行機の滑走路にも使用するためと囁かれていた。

この道路の土盛りに汗をながしたのは、当時朝鮮から強制労働に徴用された「朝鮮人」の集団であった。私たちは物珍しさからよく土盛り現場に遊びにいった。裸一貫で働かされている「朝鮮人」の弁当を見てびっくりした。それはほとんど麦の麦飯の上に、真っ赤にとん芥子がのっかかっていたからである。「おかず」がないのが子ども心に不思議でならなかった。

日本が朝鮮半島を奪ったのは一九一〇年八月二二日の「日韓併合条約」である。この条約で、この北陸の田舎にも「朝鮮人」が「強制労働」で現れたのであった。

日本が戦後約六年間アメリカ軍の「占領下」にあり、一九五一年八月に平和条約で独立国となった。しかし同時に「日米安全保障条約」でその「占領」

がそのまま続く仕組みがつくられた。日本中、ところかまわない米兵の駐留と核の持込である。それが六七年間もそれが続いている。朝鮮半島が日本の植民地であった期間三五年の倍も経ったのである。

フィリピンはスペインから独立したが、間もなくアメリカの植民地になったのは一八九五年である。しかしスーピック、クラーク基地を取り巻いてアメリカを追い出したのは一九四五年であった。この期間は四八年間で、私たちの六七年の三分の二にすぎない。

奈良時代、誰もが遠くに思い描く日本人のまほろば、しかし数えてみるとこの時代は七一〇年からの八四年間である。奈良時代に匹敵するくらいの間、日本はアメリカに従属してきたのである。

社会保障と税の一体改革について

あずま こうじ

何としても社会保障を減らし、消費税をあげたいという執念はマニフェスト違反をゴマカスためのコトバあそびです。しかし、それにしてもお粗末です。「自助」「共助」「公助」の最適バランスとは何だ。国会で「自助」「共助」にふれるのは、個人の自由の侵害です。それに続いて駄目押しします。国民相互の共助・連帯を支援するのが基本だということなのです。国の役割は「公助」を決めることです。「自助」「共助」「連帯」というのは、個人の責任で自ら決定するもので、国に指示されてするものではありません。

高齢化と少子化で大変と言うけれど、高齢化した

人たちは働き続けて国を支えてきたし、それなりに自分たちの年金分は蓄積してきた。少子化の次代の若者につけを残すことはしてきていない。国際競争力のない国でも安定した社会保障はできている。地方自治体もかつては赤字自治体はほとんどなかった。それを無駄な仕事をさせ損をさせ、赤字団体にさせ、ムダなダムや、ムダな港湾や、ムダな飛行場など作らせ、大きな企業だけを大切にしてきた。そして、国民の自助だ、国民相互の共助だと、あと始末を国民に押し付ける。こんなことが政治ではない。

国民にも責任があるというなら、こんなバカげた政治家に票を入れてきたことです。これは誰かの責任じゃなくて自分の責任です。世界の平和を守り、世界の民主主義を育てるのはかなりむずかしいが、日本の政治を変えるのは自分たちの力でできるはず。本当の共助・連帯と民主主義を育てあげることができなかったのですから自分たちの責任です。

故郷（ふるさと）と福島原子力災害事故

飯田克平

人の移動が激しくなった現在でも、集落はそこから育っていった人々の故郷であることは変わらないでしょう。

私の祖父は、明治維新後の文明開化の嵐の中、土地・財産を失い、隣町に出た父は、一〇年後故郷の村に帰り、小工場を経営しました。その一〇年後にやっと故郷の集落に戻り、さらにその二〇年後、六〇代になってやっと昔の土地を買い戻し

ました。物作りで土地代を用意できた明治の父にとつて、それは名誉ある帰郷でありました。

故郷ということで今一番私の心にかかっていることは、福島原子力災害で避難した人々のことです。今回の災害は、国の失政と東京電力の慢心によつて起きた人災であり、人災によつて住民が故郷を失うことがあつてはなりません。

しかし、あの戦時中は国の失政の結果が人々に押し付けられました。国策に押されて旧満州に夢を求めて移住した人々は、敗戦によつて第二の故郷を失い、集団自決など悲惨な結果を迎えました。昨年一二月に、国は、ようやく放射能汚染による長期帰郷困難地域の存在を認めました。災害一ヶ月、国は長期的対応へと転換し、集団的避難と帰郷の権利を保障すべきです。本来、国は災害直後から長期帰郷困難な地域が出ると判断し、長期的対策を立てるべきだったのです。

私の父のように個人の場合でも、帰郷のためには、長い年月を要しました。福島では、汚染を超えた帰郷の実現は、二〇年、三〇年、あるいは百年先、今の子どもたちの子や孫の時代になる場合もあるでしょう。

そのためには、集団避難、本格的住宅と学校・病院など必要な施設の建設、地域社会の構築と長期にわたる帰郷の権利を保障すべきです。国と東京電力は、このことに全力を尽くすべきです。それが原子力災害に対する最低限度償還だと思います。故郷はそのように貴重なものだと思います。

原発の下請け労働者の実態

岩原茂明

一月二八日の北陸中日新聞によると、原発の四次下請けの日給はたった八千円の方もおられるとのことだ。食事する場所も毎時十二ミリシーベルトとあつた。

労働基準法が「形式的には請負、派遣などの形態をとっている場合であっても、実質的にみると注文主がと請負人の労働者等の間に労働契約関係があるとするのは、指揮・監督があるかどうかが決め手だ。それ故、逆にかんじんなときにも災いが起きてくる。

原発のトラブルでなんらかの指示が出たときにも、電力会社の指示に従うかどうかを、下請け労働者個々人が自分の日当と健康を秤にかけないといけない。

話にならない日給で吸わされる放射能 茂明
(参考句 鶴彬)

「治安維持法犠牲者への

国家賠償法の制定を求める意見書」

かほく市議会が全会一致で採択

内灘町・津幡町に続いて県内3番目

今回の陳情書は治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟県本部が各自自治体を訪問し要請していたものです。県内では内灘町、津幡町で採択されて一四年ぶりの採択です。かほく市は反戦川柳作家鶴彬の出

身地であり、県内外の運動に大きな励ましになるでしょう。意見書の全文を紹介します。

内閣総理大臣 様

治安維持法犠牲者国家賠償法の制定に関する意見書

一九二五年に制定された治安維持法により、戦前の軍国主義政治のもとで主権在民、民主主義、侵略戦争反対などを唱えたことを理由に、多くの人たちが弾圧され、犠牲となった。治安維持法が廃止されるまでの二〇年間に逮捕された人は数一〇万人、送検された人は七万五千人余、拷問により虐殺された人や獄死した人は約二千人に上っており、石川県でも二〇〇人以上の人が検挙されている。

我が国では、戦後、治安維持法が人道に反する悪法として廃止され、この法律によつて処刑された人々は無罪とされたが、しかし、これまでの歴代政府は何ら補償措置をしていない。

ドイツでは、「戦争犯罪人と人道に反する罪に時効はない」という国際法に基づき、今も戦犯を追究し、犠牲者に謝罪と賠償を行っており、イタリアでも国家賠償法を制定し、犠牲者に終身年金を支給している。また、条約を批准していないアメリカやカナダでも、戦争中の日系人強制収容について謝罪と賠償が行われている。

治安維持法の制定から八五年が経過し、生存する犠牲者はわずかとなっている。この人々の存命中に一日も早く政府による謝罪と賠償を実現することは、人道上当然の急務であり、再び戦争と

暗黒政治を許さない証となるものである。

よって、国会及び政府に置かれては、(仮称)治安維持法犠牲者国家賠償法を制定されるよう強く要望する。

以上、地方自治法第九九条の規定により意見書を提出する。

平成二十三年一月二二日

石川県かほく市議会議長 竹内 幹雄

詩人会議かなざわ「独標」より

不動の意志

山口修治

『明日 家族で参加するのよ

受話器から届いた沖縄で暮らす友の声

明日 こちらでの連帯行動に参加するよ

メールを送って受話器を置いた

二〇一〇年四月二五日の昼下がり

憲法改悪反対石川県共同センターの呼びかけ

普天間基地の無条件返還を求める署名行動に

職場の青年と金沢駅前に立つ

真っ直ぐ迷わずやって来た高校生

「父の転勤で沖縄からこちらに来ています

普天間に母の実家があるんです」と

さわやかに署名をしていった

そして 地元の青年たちも

三二名が参加した一時間

一三五筆につながった一時間

まもなく沖縄の県民集会が始まる』

と記して二年近くたった今

交代ごとに見識と失言を繰り返す大臣と

こそ泥みたいに運びこんだ書類

あげくのはての選挙介入の防衛局長の講話

でも

どんな無法なことを繰り返しても

無条件返還への沖縄県民と我らの意志は不動

『平和の礎』は砕けない

「和定例句会報」より

宿題「こだわり」

岩原茂明 選

こだわった神話で列島破壊させ

大峰

アメリカのTPPにこだわるどじょう

和子

同盟に拘りいつも馬鹿を見る

林

敗北にこだわり属国いつまでも

迷天使

メリケンにこだわり日本が見えません

一杜

人位

民よりも辺野古にこだわるおべっか性

一杜

地位

こだわりは原発輸出の収束宣言

啓

天位

可能ゼロ辺野古にこだわり笠に着る

啓

軸

こだわりのIP電話もう古い

絵手紙コーナー

金沢医療生協絵手紙班

近松 美喜子



《非核平和・行事予定》

- ・二月二九日(火)〜三月一日(水)：被災五八年三・一ピキニデー日本原水協集会／静岡市・墓参行進／焼津市
- ・三月三日(土)一四時：わらび座六〇周年記念作品「アテルイ 北の耀星」・金沢文化ホール・主催わらび座「アテルイ」を楽しむ会
- ・三月四日(日)一四時：「悪魔の飽食」七三一部隊の真相」講師：勸昭三全日本民医連名誉会長／城北病院名誉院長・金沢勤労者プラザ一〇一号室・主催「悪魔の飽食」石川公演実行委員会
- ・三月六日(火)一二時半：核廃絶街頭署名行動・Mザ前
- ・三月八日(木)一八時半：二〇一二年国際女性デー石川県集会「沖縄の平和の願い子らに手渡すために」いしがき女性九条の会事務局長藤井幸子・石川県集会実行委員会
- ・三月十一日(日)一三時半：「原発ゼロに」なくせ原発震災・原発事故からの復興を三・一一石川県集会・県教育会館・主催石川革新懇／石川県労連／原発センター
- ・三月一七日(土)一三時半：原水爆禁止石川県協議会総会・石川県学習会館
- ・三月二二日(木)午後：「福島原発事故一周年と非核の政府を求める会結成二五周年記念講演会・東京
- ・三月二三日(金)一四時と一八時一五分：前進座公演・邦楽ホール・主催前進座見る会
- ・三月二七日(火)一八時：非核の政府を求める石川の会 常任世話人会・いちば館四階研修室三
- ・四月一日(日)一三時半〜一六時：三・一一を忘れない「新たな福祉国家を展望する」福祉国家と基本法研

究会の取り組み・金沢市松ヶ枝福祉館四階・主催：医療・福祉問題研究会／石川県社会保障推進協議会

- ・四月一日(日)：「第三回ふくしまのつどい」ほんとうのそらを」金沢市民芸術村・主催ふくしま311・石川結の会
- ・四月一日(日)一三時：改憲の情勢学習と活動交流「原発と核武装」岩淵正明弁護士／「東アジアとの手つなぎ」ショップ経営小浦むつみ氏・金沢勤労者プラザ四〇六号・九条の会石川ネット
- ・四月九日(月)一二時半：核廃絶街頭署名行動・Mザ前
- ・五月三日(木)休日一四時：輝け九条石川県民集会・講演「憲法と私」ジェームス三木氏／北川てつコンサート・本多の森ホール・主催九条の会石川ネット
- ・五月九日(水)一二時半：廃絶街頭署名行動・Mザ前
- ・五月二〇日(日)一四時：兼六地域九条の会総会と記念講演：高柳新元全日本民主医療機関連合会会長・石引金沢聖ヨハネ教会
- ・六月六日(水)一二時：核廃絶街頭署名行動・Mザ前
- ・六月一〇日(日)一四時：第三回核兵器廃絶記念デー・ウクライナの歌姫「ナターシャ・ゲジ」コンサート & 被曝証言を聞く会」石川県教育会館三階ホール・主催核戦争を防止する石川医師の会
- ・六月一〇日(日)：核廃絶国民平和大行進輪島市出発
- ・六月一〇日(日)：石川県母親大会
- ・六月一六日(土)：核廃絶国民平和行進富山県から石川県へ
- ・六月一七日(日)一四時：カンタータ「悪魔の飽食」第二三回全国縦断コンサート石川公演と森村誠一×池辺晋一郎両氏のトーク・主催：石川公演実行委員会・県立音楽堂コンサートホール

《編集後記》

◎非核の政府を求める石川の会は、昨年二月より会報編集委員会を発足し、編集委員五人の集団編集により紙面刷新に取り組んできました。この一年は核兵器廃絶をめぐる世界と日本の動向、福島原発事故の実態報告や講演会要録、被災地レポート、非核・平和を求める絵手紙や叙事川柳など多彩な紙面構成となり、会報への寄稿依頼を通じて会員増加にもつながっています。

市民団体の機関紙には四つの機能(①報道記事、②評論、③文芸欄、④読者の意見)があります。特に読者とともにつくっているか、読者の声がどれくらい紙面に載っているかが、読まれる機関紙か否かの指標と云われています。このため本紙でも月号から会員による「読者の声」欄を設けることにしました(六〜七面に掲載)。

「読者の声」欄では、「非核・平和活動に最初に参加されたきっかけ」「今年の抱負」「最近感じていること」「本紙の感想」などの『リレーエッセイ』を、目指しています。会員の皆様によるリレー連載をよろしく願います。(か)

◎飯田先生、東先生、勸先生の『リレーエッセイ』原稿を拝読して、心に染み渡り、拍手・喝采を感じ、体が熱くなりました。『リレーエッセイ』の連載開始が一〇年遅かった！と感じました。このうえは、できる限り多くの仲間がこの『非核・いしかわ』紙面をあらゆる方法で届けることです。(こ)